

コーヒーとカフェの起源と広がり

—— イスラム世界 ——

岩 切 正 介*

The Origin and Spread of Coffee and Cafés in the Islamic Orient

Masaaki IWAKIRI

1. 飲用の始まりと広がり
 - イエメンとスーフィー教徒
 - エチオピア
 - アラビア半島からトルコへ
2. カフェの出現
3. コーヒーとカフェの禁止令
4. アラビア医学のコーヒー論
5. 産地と取引

1 飲用の始まりと広がり

はじめに

中近東世界のイスラム社会に広まっていたコーヒーとカフェをヨーロッパに初めて紹介したのは、1582年ドイツのフランクフルトで出版された医師・植物学者L・ラオヴォルフの『東方諸国への旅』である。以後、植物学者、医者、旅行家、外交使節、東洋学者、商人などによって、順次、ヨーロッパの社会に知られていく。この紹介の初期段階は、およそ50年である。つまり、17世紀の半ばまでである。これ以降、ヨーロッパのコーヒーとカフェは発展の足取りは、じつに素早い。本家のイスラム世界では、この17世紀半ばまでにコーヒーとカフェはどのように展開をたどり、どのような姿になっていたのか。

イエメンとスーフィー教徒

史料で見る限り、コーヒーの飲用の始まりの時期は、およそ15世紀の半ばで、場所は、アラビア半島先端の国イエメン、そして、だれが飲み始めたか、の答えは、イエメンの町アデンのスーフィー教徒たちが、になるらしい。イエメンは、15世紀には、すでにイスラ

*インターカルチャー講座

ムの世界になっていた。スーフィー教徒とは、神秘体験によって神との一体感を得ようとするイスラム教の神秘主義者である。コーヒーの覚醒作用を夜の勤行に役立てるために、コーヒーを飲み始めた。コーヒーをメッカやカイロに広めていくのもスーフィー教徒である。スーフィー教徒に先導されて広まったコーヒーは、やがて一般化の道をたどる。16世紀の初めには、アラビア半島もエジプトもオスマン・トルコの領土になる。これを期にコーヒーは、シリアやトルコ本土にも広まり、オスマン・トルコ全域のポピュラーな飲み物になる。ヨーロッパ人がコーヒーを知るのは、このような状態になってからである。ヨーロッパでは、当初からコーヒーはトルコの飲み物と理解された。いくら不正確なのだが、トルコが長らくハンガリーからセルビアまで支配し、ウィーンに迫った中近東の大国だったから、ヨーロッパ人の意識地図では、大きな存在だった。しかしこの時点でもなお、遠い独立国イエメンがコーヒー生産を独占しており、コーヒーは、モカやバイト・アル・ファキールからアラビアやトルコのイスラム商人によって消費地に運ばれて行った。コーヒーは、生産、交易、販売とも、イスラム教徒の手にあった商品である。17世紀の初めには、はやくも、オランダ、イギリスの商人が、コーヒーの収穫期にモカの市場に姿をみせ、コーヒーの買い付けを始めている。

エチオピアーコーヒーの木の原産地

世界で飲まれることになるコーヒーの原木があったのは、イエメンの対岸の国エチオピアである。この種は後に植物学者リンネによってアラビカ種と命名される。19世紀になってから新たに発見された二種、ロブスタ種とリベリカ種も同じアフリカが原産地である。エチオピアは、4世紀には、キリスト教を国教とし、6世紀には、紅海をまたぐ強国であった。地理は、熱帯雨林と高原・山岳と砂漠の地帯に分かれ、海岸沿いの砂漠地帯は、後にイスラム教の地域となった。高原地帯では、今なお、原始キリスト教の信仰が厚い。ここでは、赤道西風が、山の斜面に当たって雨をもたらず。湿った肥沃な土壌と太陽と高度が、高原にコーヒーの木を育てた。川筋の多い、カファとよばれるエチオピア南西部の高原地方が、アラビカ種の古里である。コーヒーの飲用がこの地に始まったのかについては、記録がない。しかし、10世紀にはすでに飲用されていた模様である。コーヒーが心と身体に与える力が利用されていた。エチオピアには現在でもコーヒーの原木の林があり、コーヒーの収穫が行われ、村では収穫祭が祝われ、集まった人々にコーヒーが振る舞われる。

エチオピアにはまたコーヒー・セレモニーがあり、おもに女性の社交の場となっている。女性が友人知人など客を招き、一室に集まる。主人役の女性は、コーヒーの皮を取り、豆を焙って、砕いて、陶製のポットに入れて煮出す。火から下ろし専用の敷物の上に置いてしばらく澄ませてから、陶製の円い小振りの器に注ぎ、客に提供する。焼き菓子が出る。コーヒーは順に3回出されて、コーヒーの集まりは終わる。客はすべての作業を見ながらおしゃべりをして、2、3時間過ごす。コーヒー・セレモニーでは、香も焚かれる。コーヒー・セレモニーは当番のように順に家の間を回る。日曜には、男性が加わることもある。男性が友人、上司、親戚をコーヒー・セレモニーに呼ぶこともある。コーヒー・セレモニーはエチオピア社会では階層の別なく、また都会でも村でも見られる。

収穫祭とコーヒーの集い、これは共に起源は古そうである⁽¹⁾。

古いアラビア医学書のコーヒー

コーヒーが、いつエチオピアからアラビア半島に渡ったかははっきりしない。ただ、10世紀のアラビア医学の最高峰とされるアル・ラージー（850—922）の医書には、コーヒーが薬として使われていたことを示す記述が見つかる。11世紀のやはりアラビア医学の権威イブン・シーナ〔ラテン名では、アヴィケンナ〕（980—1037）は、コーヒーの薬効を記述している。「コーヒーは、熱にして乾。別説では、冷。体の器官を強め、肌をきれいにする。皮膚の下の湿りを乾かす。体にすばらし香を与える」と。11世紀のやはり偉大な医家の一人ベンギアズラーヒも同様に述べているという。アラビア医学の柱のひとつは、いわゆる本草学で、あらゆる食べ物や薬草について、それを摂取したとき、体内で及ぼす熱冷乾湿の四つの作用の別と、そしてその程度を記録した。程度は一から四までの四段階あった。段階一は食べ物、二は食べ物で薬、三は薬、四段階のものは、毒であった。このような本草学は食養生の知識の基礎でもあった。食養生あるいは栄養学と治療は連続した一つの領域だったといえる。医書にコーヒーの記述があるのは、コーヒーが少なくとも、珍しくても知られていた、の意味になるであろう。11世紀ではコーヒーは、植物としても飲み物としても、まだアラビア半島に入っていなかったといわれる⁽²⁾。

「コーヒーの適法性に関する最良の証拠」

コーヒーの原産地エチオピアと史料上飲用が始まったとされるイエメンの間をつなぎ、アラビア半島での飲用の始まりと普及について、確実なことを教えてくれるのは、カイロ在住のジャズィーリー（ザイン・アッデーイン・アブド・アル・カーディル・イブン・ムハンマド・アル・アンサーリ・アル・ジャズィーリー・アルハンバリー）が書き残した「コーヒーの適法性に関する最良の証拠」である。ジャズィーリーは、メディナの出身、カイロの人で、ハンバル派に属した。スーフィー教団の熱心なメンバーではなかったかもしれないが、神秘主義と関係の深い人物で、当時のスーフィーの指導者の多くを知っていたとされている。メッカやメディナへ再三でかけている。この文書が書かれた時期は、少なくとも1556年以降とされる⁽³⁾。背景にあるのは、イスラム世界で繰り広げられた、コーヒーはシャリーア（イスラム法）に照らして適法か違法かの論争である。この文書は、コーヒー弁護の立場から書かれている。この文書が述べるコーヒーの飲用の始まりは、イエメンでスーフィー教徒が、夜の勤行の時に目覚ましのために飲み始めた、ということである。そのきっかけを作った人物は長老アッ・ザブハーニー（通称）で、アッ・ザブハーニーは、アデン（イエメンの町で中継港）から用あってエチオピアへ行ったとき、人々がカフワを飲んでいるのを見た。アデンに戻り、病気になったとき、カフワを思い出し、飲んでみると、効果があった。コーヒーには、疲労と無気力を取り去り、活力と元気をもたらす力があるとわかる。アッ・ザブハーニーはスーフィー教徒に転じた。するとスーフィー教徒の間で、師を模範として、コーヒーを飲むことが広まった。このアッ・ザブハーニーが亡くなるのは、イスラム暦875年（西暦1470/71年）である。こうしてまずスーフィー教徒に広

まったコーヒーは、次に、一般の学者、一般の人々も学業や仕事のために飲むようになった、という⁽⁴⁾。

この基本情報が記されている当該箇所を次にイスラム文化史家の矢島文夫氏の訳で挙げる。

「この世紀〔16世紀〕はじめにマスル〔エジプト、特にカイロ〕に届いたニュースによると、イエメンでコーヒー〔原語カフワ〕と呼ばれる飲物がひろまり、スーフィー道士の長老その他の人たちが勤行のときに覚醒してられるようにこれを用いているが、彼らはこれをよく知られている方式によって行っているという。それから少しのちにわれわれのもとに伝えられたところによると、それ〔コーヒー〕の出現と普及は学識ある長老イマーム・ムフティー・スーフィー道士のジャマルッ・ディーン・アブー・アブドゥルラー・ムハンマド・イブン・サアド、通称アッ・ザブハーニーの手によって行われたという」。

「われわれがきいたところによると、彼は——彼にアッラーの恵みあらんことを——アデンでファトワー〔イスラムの法令〕の改正を委任されていた。当時、ファトワー施行者はファトワーが正しいか改正を要するかを決めることが委ねられていて、彼は自筆で本文の下にこれを注記することになっていた。われわれがきいたところによれば、これ〔コーヒー〕の導入の理由は次のようである。彼が——彼にアッラーの恵みあらんことを——ある用事でアデンを出てアジャム〔外国。ここではエチオピア〕に行き、しばらくここに滞在した。彼はここの人たちがカフワを用いているのを見出したが、その特性を彼は知らなかった。それから彼はアデンに帰ったが、病気になり、それ〔カフワ〕を思い出してこれを飲み、これが役に立った。彼はその特性が疲労と怠惰（だるさ、無気力の意か—筆者）を去らせ、体に活力と元気をもたらすことを見出した。そこで彼はスーフィー道士となったとき、アデンの彼および他のスーフィー道士たちは、上述のようにこれを飲むようになった。それから学者たちも一般の人たちもこれにならって、学業やその他の仕事をするためにもこれを飲むようになり普及しはじめた」。

「それから私は、ザビード〔イエメンの一都市〕に住む神の友の一人、学人ジャマルッ・ディーン・アブー・アブドゥルラー・ムハンマド・イブン・アブドゥル・ガッファール・バー・アラウィーに手紙を書き、学者や一般の人たちが飲んでいるものについて、その最初の出現について教えてくれるよう頼んだ」。

そしてその答えは次のようであった。

「私は長老たちにこのことを尋ねたが、最古参は90歳をこえる私のおじ、学者ワジフッ・ディーン・アブドゥル・ラハマーン・イブン・イブラーヒーム・アル・アラウィーで、彼が私に語るには、アデンにいたときコーヒーを飲用している貧しい若干のスーフィー道士がおり、これがアデン港最高の法学者ムハンマド・バー・ファドル・アル・ハドラミーと、ムハンマド・アッ・ザブハーニーらのためこれを作った。この二人は一同とともにこれを飲んだのであり、これを範例としたのである、と」。

「このアッ・ザブハーニーがアデンにはじめて[コーヒーを]持ちこんだか、他の人であったとしてもこの人物と関係があるらしく、その結果これはここに出現し普及するようになったのである。ザブハーニーは875年[西暦1470/71年]に没した」。⁽⁵⁾

なお、P.S.Hattox 著の "Coffee and Coffeehouses .The Origins of Social Beverage in the Medieval Near East (1985) では、英訳が読める⁽⁶⁾。「コーヒーの適法性に関する最良の証拠」のアラビア語の写本は、パリの国立図書館(イスラム暦996年、西暦1587/88年)とスペインのエスコリアル図書館(イスラム暦966年、西暦1558/59年)にあり、字体は違い、パリ写本では68フォリオの分量だという⁽⁷⁾。

この論文は、コーヒーの始まりその他メッカの事件などについての記述を含み包括的な点で、貴重な資料だが、コーヒーについて書かれた論文としては初めてのものではない。16世紀には、コーヒーに関する論文がいくつか書かれていた。おそらく最初のものは、1530年頃、ガッファール(シハーブ・アッディーン・アフマド・イブン・アブド・アル・ガッファール)が書いたものであろうといわれるが、これは散逸した。また、マッキー(ファフル・アッディーン・アブー・バクル・イブン・アビー・ヤズード・アル・マッキー)の「コーヒーの合法性について心を刺激する書」もある。ジャズィーリーのものは、その大部分が、現存しないガッファールのコーヒー論文の引用からなり、ほかにマッキーの論文を引用している。また、著者は不明だが、16世紀には、「コーヒーの法判断に関する論考」があり、そこにはガッファールとジャズィーリーの論文がよく引用されているという。さらに、「バルシュ(麻薬)を扱う者への非難についての告発者たちの順化」(ヌール・アッディーン・アブー・アルサン・アリー・イブン・アル・ジャザール)には、最後の数ページでコーヒーを取り上げ、不法な物質を混ぜなければ、合法だとしている。医者フサイニー(ムハンマド・イブン・マフルード・イブン・ブルハーン・アッディーン・アッザイニー・アル・フサイニー)は、コーヒーの有害な作用を述べている。著者は不明だが、コーヒー弁護の書「コーヒーに関するもっとも優れた解明の書」も残されている⁽⁸⁾。

ズィクル(念神勤行)に始まる

スーフィー教徒は、人里から離れて閉鎖的な宗教生活をするのではなく、多くが在家の信者で、昼間は、職人や商人として働き、夜、ズィクルという共同の礼拝儀礼にやってくる。一定の手順で、頭や手、または体全体を揺り動かし、祈禱文句をとнаえて恍惚状態を招き寄せ、神に近づき宗教的な至福に至ろうとした。信徒はそのとき、神との神秘的一体感を味わい、宗教的法悦に浸る。このような儀礼の場で、従前から、精神を高揚させるために、薬物のハシーシュなどを使用したり、カートとい灌木の葉から作った飲み物が援用されていた。この夜の勤行を眠気が襲うのも避けられない。眠気覚ましにコーヒーが、とくに飲まれるようになった。コーヒーはズィクルの前に配られ飲まれた⁽⁹⁾。もっとも、はじめは豆から作ったコーヒーでなく、外皮を材料にしたコーヒー[カフワ・アルキシユリーアまたはキシユルといった]が飲まれたらしい⁽¹⁰⁾。ズックルでは、ya kawī (ヤー・カウィー)という祈禱文句が116回繰り返される。数字の116(khwh)は、音がアッラーの最美容

であるkawi「強い」に似ており、さらに、偶然であろうが、コーヒー (kahwa) にも似ている。このように複合した連想を内包する祈禱文句を勤行の集まりの場で繰り返し唱えるうちに、スーフィー教徒は恍惚状態に入る。こうして、スーフィー教徒にとって、コーヒーは、念神勤行に不可欠な飲み物となり、宗教的な法悦と善に導いてくれる飲み物との地位を得る⁽¹¹⁾。コーヒーは神の恵みあるいは賜物といったニュアンスさえ持つようになる。アハマド・イブン・アラウィー・バー・ジャハダブ師は、晩年コーヒーしか摂らず、「コーヒーを体にたたえて死ぬ者は業火に焼かれない(地獄に落ちない)」と言ったという⁽¹²⁾。周知のように、イスラム教では、「近い将来」に、アラーの神によってこの世での善行悪業が裁かれ、人々は天国と地獄に別れて住むことになり、地獄では永遠に業火に焼かれる。

ズィクルに参加するスーフィー教徒は、大部分が在家の信徒であったし、社会の幅広い階層にわたっていた⁽¹³⁾。集まりは開放的で、他派の信徒にもコーヒーが振る舞われたから、コーヒーは一般の人々に知られる機縁になった⁽¹⁴⁾。

アラビア半島からトルコへ

イエメンで飲用が始まるのにともない、イエメンでコーヒーの栽培も始められる。コーヒーが栽培植物になるのも、イエメンにおいてである。スーフィー教徒の飲用とコーヒーの栽培化。これが、コーヒーをアラビア半島、さらにエジプトに広げていく基礎になる。のちに触れるように、コーヒーがイスラム社会に広く普及するのは、コーヒーをカフェで作って飲ませるとともに、商品として売りさばくという商売を始めた商人の力が大きい。スーフィー教徒がコーヒーを飲むのは、基本的に自分たちの儀式の時である。本格的な普及の力は、コーヒーの商品性に目をつけた商人たちから生まれた。ともあれ、メッカやメディナ、さらにスエズを越えてカイロにコーヒー前線をひろげていくのは、スーフィー教徒である⁽¹⁵⁾。そして、コーヒーは、その行く先々でやがて、スーフィー教徒の儀式の飲み物から、商品となり一般の人々の日常の飲み物になる。メッカでのコーヒーの出現は、15世紀の末頃と推定されている⁽¹⁶⁾。カイロでは、1500年から10年の間にコーヒーがスーフィー教徒とともに姿をみせた。この時期に、モスクと最高の学院があったアズハルの神学部門の建物にイエメン人のスーフィー教徒の宿舎があり、そこで開かれたズィクルという前述の儀式でコーヒーが飲まれた、という。この集会には、メッカやメディナからやってきたスーフィー教徒も参加し、一般の人々にもコーヒーが振る舞われたという⁽¹⁷⁾。コーヒーは、こうして、1520年頃までに、シリアにも広まっていく⁽¹⁸⁾。したがって、およそだが、15世紀の半ばにコーヒーがイエメンのアデンで飲まれ始め、メッカ、メディナと紅海沿いにアラビア半島を北上し、カイロやシリアに達するのは、およそ1520年頃である。

イスラム世界の辺境の地アナトリア半島の北西部に発したオスマン・トルコが勢力を伸ばし、シリアとエジプトを領するようになるのは、1517年である。オスマン・トルコは、メッカもメディナも押さえる。この帝国の領土は広く、東はイラクまで、西はセルビアまで。北アフリカ一帯も支配した。スレイマン一世(1520-66)の築いたこの大帝国は、海も支配した。紅海、ペルシャ湾、カピス海、黒海、エーゲ海、地中海に接し、あるいは支配した。抱える人口は、およそ1,400万人。その都イスタンブールは40万人の人口を擁し

た。当時のスペインは500万人、イギリスは250万人であった。この広い版図のなかを、商人、船乗り、巡礼者、イスラム法学者やその他の学者、軍人、役人が、さかんに行き来する。商業のネットワークはよく発達していた。巡礼期間、イルラム圏の各地からやってくる巡礼者は、メッカ近郊のミナに滞在し、そこの歳の市で物々交換でコーヒーを入手して、それぞれの故国へ持ち帰った。⁽¹⁹⁾ この広いイスラム世界が、新たにコーヒーの飲まれる地域になる。スルタンの都イスタンブールでコーヒーが売られ始めるのは、16世紀の半ば1554年である⁽²⁰⁾。おおそえば、この16世紀の間にコーヒーは、アラビア半島の飲み物から、オスマン・トルコ帝国の飲み物になる。あるいは、アラブ人の飲み物からトルコ人の飲み物になる。むろん、この頃には、神との合一を促すスーフィー教徒の飲み物から、広く社会各層の家庭でひろく飲まれ、また社交のための公共の場所で飲まれる飲み物に変わっている⁽²¹⁾。

2 カフェの出現

社交の楽しみ—急速な広がり

スーフィー教徒が、礼拝のためにイエメンから持ち出したコーヒーの量は、わずかであり、コーヒーのような覚醒剤を使用することについては固く秘密を守ろうとしたともいわれる。コーヒーを飲み始め各地にもって行ったのは、スーフィー教徒だが、コーヒーを広く家庭の飲み物、カフェの飲み物として広く社会に普及させたのは、商人たちであった⁽²²⁾。商人は、コーヒーの商品性に目をつけた。ここにコーヒーの本格的な普及のもとがあり、出来合いのコーヒーを売る店、つまりカフェの起源もある。商人たちは、たんに豆を提供するだけでなく、実際にその材料からコーヒーを作って飲ませた。これが普及を助けると考えたのである。この方法が成功し、メッカ、メディナ、カイロ、ダマスカス、イスタンブールなどに、コーヒーを販売し、作って飲ませる店ができた。コーヒーが各地に伝わるのとカフェの出現とは、ほぼくびすを接し、形影あいともなう関係にある。

最初のカフェはおそらくイエメンに生まれたものと推測するのが妥当かもしれないが、記録で証明することはできない。最初のカフェの記録は、メッカになる。記録は、しかし明快に最初のカフェの誕生を教えてくれるのではない。記録は、メッカの地にすでに1511年にはカフェがあった、それもかなり多くあったことを教える。ジャズィーリーはこう書いている。

コーヒーの売買は、アミール（カーイル・ベグ）の施政期間中もそれ以前も、街の通りやどこにでもある居酒屋やカフェで堂々に行われていた。また、ハラーム・モスク〔イスラムのもっとも神聖な神殿カーバを囲む聖所〕では昼夜を分かつたずコーヒーを飲んでいた⁽²³⁾。

メッカにコーヒーが姿をみせてから間もない頃だから、ここでは、コーヒーの出現とカフェの誕生はくびすを接していた、といえよう。カフェには、男女の客が訪れ、音楽を聞

き、賭けてチェスあるいは類似した遊戯をした、と伝わる⁽²⁴⁾。カイロについても記録は、1531年にはすでにカフェが開かれていた、と伝えている。最初のカフェは、おそらく16世紀の初め、と推定される⁽²⁵⁾。ダマスカスでは、最初のカフェは1530年に生まれる。アレppoでは1532年である。イスタンブール最初のカフェは1554年で、アレppo出のハキム（ハクム）とダマスカス出のシェムスという者が中心地〔現在のTahtakale〕にそれぞれカフェを開き財産を築いたという⁽²⁶⁾。このイスタンブールで、カフェは、すぐに、余暇の人士、教養人、文学者などを引き寄せた。さっそく気晴らしと楽しみを求めて集まったのである。とりわけ文学愛好者は、作品朗読、自作披露と相互批評、文芸論の交換などをカフェで楽しむようになった。役人、裁判官、イスラム法学者もやってくる。議論をする楽しみ、読む楽しみ、新しい物事を知る楽しみ、チェスをする楽しみ。イスタンブールという第一の都会で、カフェはいかにも政治・文化の中心地という都市の性格を反映させ、人気ある文化施設となって、知恵の学院（メクテビ・イルファーン）との別称も得る⁽²⁷⁾。

16世紀の中頃のものとされるカフェの細密画がある。まず、画の中央には身分の高い客が陶器のカップでコーヒーを飲んでおり、仲間あるいはお付きの者が数名いる。画の上方には文学活動をしている客たちが描かれ、朗読、目読し、あるいは議論をしている。図の下方には、バックギャモンやマンカラなどのゲームを楽しむ人々。さらに客を楽しませる楽士たち。コーヒーを用意する店主。こうしておよそ30数名が丹念に描かれている⁽²⁸⁾。この店内図に似た姿は、イスタンブール最初の二店にもすぐ再現された⁽²⁹⁾。イスラム世界のカフェは、はじめから、社会のほとんど全階層の人々を集めたようだ。「王子から乞食まで」、「地位のとても高い人を除いてだれでも」という観察が残されている。イスタンブールに開かれたばかりのカフェに集まる客には「ベイ〔高い位の者に与えられる称号〕、貴族、将校、教師、判事や法学者など」が含まれていたとも語られるし、また「身なりのよくない、あまり働かないで一日の大部分を怠惰に埋もれて過ごす庶民ばかり」（モロシーニ・1585）と見たヴェネチア人もいた。カフェは、イスラム世界の特徴を反映して、モスクの近くに多かったが⁽³⁰⁾、全体に、広範な社会層に応じ、大きくて凝った社交の場としてのカフェをはじめ、町の中心や賑やかな四辻のカフェ、川に臨んで涼しい木陰に建てられたカフェ、市場のカフェ、町の地域の庶民のカフェ、あるいは兵士たちがやってくるカフェなど、階層や地域に応じて様々のカフェがあった。特に、市場にはカフェは不可欠のものとされ、市場の計画のなかに組み入れられた。すべての人が、同じカフェに行ったのではなく、暗黙の前提に従って、使うカフェは選ばれていたのである⁽³¹⁾。

商人たちが営んだこのような店は、三つに分類できるという⁽³²⁾。ひとつは、商業地区に多い出前専門の店で、給仕がコーヒーを運んだ。商談にコーヒーはつきものというくらいの慣習になった。店内で飲ませるのではないので、店は小さく一部屋くらいであった。次に、近所の人々が使う、こじんまりした店があった。出前も引き受けたが、長椅子をおいた店内で飲ませる。店のそとに石台が置かれ、そこも客の憩うところであった。近隣のカフェといってよい。三つめが、規模も大きく、作りも工夫を凝らした都会的なカフェである。都市の中心や重要な地域にあり、あるいは見晴しのよい涼しい川べりにあった。店内に噴水があることもあった。ここでは、外の暑さ、騒音、汚さや臭いは排除され、気持ち

よくさわやかな別世界になっていた⁽³³⁾。

17世紀のイスラム世界でのこの都会的なカフェは、ヨーロッパ人旅行家などによって、たとえば、次のように描かれている。「ダマスカスのカフェはじつに美しい。たくさんの噴水、近くを流れる川、木陰、薔薇やいろいろな花々。涼しく、爽やかで楽しい場所」(テヴノー)。「(コーヒーは)そのために建てられた公共の場所で売られている……この建物は川の近くであって、内部にはたくさんの窓と二つの回廊があり、快適な安らぎの場となっている」(バグダッド。ポルトガル人冒険家ペドロ・テイシェイラ)。「地方では、大きな樹木やブドウ棚の木陰があり、戸外に大きな長椅子が置かれていた」(ドーソン)⁽³⁴⁾。

セリム二世(1566-74)の時代に、イスタンブールでは、カフェの数がおよそ6百軒ほどあったのは間違いない⁽³⁵⁾。また、1585/6年のイスタンブールではその数が、2,352軒に達しており、17世紀初めのカイロでは、2千から3千軒あった、伝える資料がある⁽³⁶⁾。誇張であろうが、それを差し引いても、カフェの広範な定着のさまがよくわかる。カイロのカフェの数は、1650年、トルコの旅行家チェレビが、643を数えている⁽³⁷⁾。1660年、カイロのカフェについて旅行家のカステラが、この町には非常に多くのカフェがあり、一日の始まりの時間あるいはいつでも、一時に四百人から五百人の客がコーヒーを飲みに来て、熱いまま飲んでいる(要約)、と描いている⁽³⁸⁾。イスラム暦九月ラマダーンのひと月の間、夜、イスラムの町のカフェは大変にぎわったという⁽³⁹⁾。ラマダーンの期間とは、一般に祭日と意識され、昼間は信者としての自覚と連帯を高める苦行の断食を行うが、日没後は文字通り祭日で、家族、親族、友人が集って賑やかな会食をする習慣があるからである⁽⁴⁰⁾。カフェは友人たちを招いて安上がりのコーヒーパーティの場にも使われた⁽⁴¹⁾。イスラム世界では、以前から、客や招いた友人には、自宅でお金をかけ宴を開き、所有物、妻、子供、奴隷を披露し一家を挙げてかれらを歓待するのが仕来りであったが、接待の場所をカフェにして僅かな出費ですませる人達も現れた、という。カフェは、一種の生活革命をもたらしたことになる⁽⁴²⁾。イスタンブールなどの都会では、道行く人にコーヒーを売り、あるいは戸口から戸口をまわって、出来合いのコーヒーを売る、街頭のコーヒー売りあるいは、コーヒーの呼び売り、つまり行商も一般的な街頭風景であった⁽⁴³⁾。もともと呼び売りは、ほとんどすべての商品について行われていたから、新しい商品コーヒーがこの形で売られるようになるのも自然だったのであろう。

会話と娯楽

人々は、おしゃべりのために、カフェへやってきた。その日あったこと、知ったこと、考えたこと、知人や女のうわさ、珍しい出来事のはなし。これを日永の無為、果てない怠惰とみ、このような時間つぶしに道徳的頹廃をみて、眉をしかめるひともいたが、人々を引き付けたのは、なによりまずおしゃべりであった。芸術、文学、科学について議論した人々もいた。そこでは、文学の最新作の朗読が行なわれ、批判を受けることもあった⁽⁴⁴⁾。

楽しみは、チェスやマンカラあるいはバックギャモンというゲームをし、これに賭けることにもあった。すでにメッカでコーヒー禁止令が出された1511年に「人々はコーヒーが

売られているところに集まり、そしてチェスやマンカラなどのゲームで賭けた」と記されている⁽⁴⁵⁾。ただ、カフェでの賭けは、メッカ、メディナを含むヘジャズ地方ではよくみられたが、アレppo、イスタンブールなどでは、賭けに触れた資料は少ないという⁽⁴⁶⁾。チェスというゲームそのものは、カフェの人気ある娯楽であった。

カフェでの楽しみは、また芸人の芸や楽士の奏でる音楽にあった。弾き語りでは楽士が弦楽器を手にして、古い騎士物語や民話、昔話を語るのであった。弾き語りは手軽で、場所もとらず、安上がりであったので、音楽の娯楽では一番おおかった。弾き語り師をカフェで雇う場合もあり、ただ場所を提供するだけの場合もあった⁽⁴⁷⁾。カフェで弾き語りをする者は、むろんそれを職業とし組合を作っていた者もいたが、学資かせぎの学生、学者などに加えて、ただ好きでする素人もいたという⁽⁴⁸⁾。カフェが提供する娯楽には、手品、踊り、楽団、人形劇などもあった⁽⁴⁹⁾。音楽は、必ずしもよいものとはされていなかった。イスラム以前から、音楽は、酒宴を盛り上げるもので、マホメット自身、音楽に肯定的な姿勢はとらなかった。信仰の篤い人々にとって、音楽は、酒宴や居酒屋との結び付きを思わせの、むしろ不愉快なものであった⁽⁵⁰⁾。人形劇は、人気があった。影絵芝居では、17世紀になってからだが、カラギョズという機知に富む庶民とインテリで気取った旦那ハジワトの間で繰り広げられる定番に人気があった⁽⁵¹⁾。

なお、カフェで客を楽しませる歌手は、男性歌手ばかりではなかった。女性の歌手もいた。歌姫はもともと居酒屋で客を楽しませていたもので、とくにメッカなどのあるヘジャズ地方では、カフェの出現以前から伝統的に、私宅での宴会や芸術家の集まりには、女性歌手が呼ばれ朗唱する習慣がみられた。メッカでカフェが出現した16世紀当初には、このような伝統習慣が、カフェに持ちこまれた。しかし、やがて、時期ははっきりしないが、かなり早い段階で女性歌手は、少なくともカフェからは姿を消した。もとより、女性歌手そのものが、歌の提供ばかりでなく、性的な享楽に応える場合もあり、イスラムの正統的な社会規範に反する存在だったからである⁽⁵²⁾。

カフェで女性歌手は一般化しないままに終わったが、他方では、一部のカフェには、多様な性的趣味を満たすために、美少年が置かれた。17世紀初めのイスタンブールのカフェで、客は美しく着飾った美少年の手からコーヒーをサービスされるばかりでなく、慰みものとして斡旋してもらえた。はっきりと「肉欲の喜びのために提供される若者」がいる、と指摘する資料もある⁽⁵³⁾。道徳上よろしくない快楽は、これにとどまらなかった。カフェ出現とともに、といってよい時期から、カフェでは、麻薬がコーヒーに混ぜて飲まれることがあった。前述のジャズイーリーがすでに言っている。「本来は適法な飲み物に不純なものを混ぜて汚し不法にすることが行われている。ファーズ・アッパース〔胡椒、アヘン、サフラン、ペリトリ、パンジ、とうだいぐさ、甘松香を混ぜ合わせた薬〕もそうした不純物のひとつである」（要約）「ハシーシュの他に〔コーヒーに〕混ぜる〔麻薬性の〕練物がある。バルシュ（barsh）と呼ばれる練物のように、なかにアヘンを混ぜる〔他の薬の使用法〕もある……、それは〔1530年代〕から普及し始めた。多くの人々がこの誘惑によって身を滅ぼし、悪魔の誘惑に屈した獣のごとくみなされたのである」⁽⁵⁴⁾。

仲間と集っての気晴らしや楽しみ、交友ばかりでなく、カフェでは実利的な話も交わさ

れたのか。後のヨーロッパで見られるように、カフェは、商談の弾む場所でもあったのか。イスタンブールを除けば、イスラム社会のカフェはこの機能をあまり果たしていなかったようだ⁽⁵⁶⁾。

しかし、イスラム社会でカフェは、政治的な役割を担うことがあった。カフェは、いち早くニュースを耳にできたところである。高官の出入りするカフェでは、高官による漏洩もあったはずである。宮廷や統治者内部のニュース、帝国や政治に関する情報が、カフェでは入手しやすい。政治家や政策が批判され、不満が語られる。そこから、共鳴、陰謀、結社、クーデタ計画などが生まれる。カフェは、イスタンブールに登場するとかなり早い時期からこのような政治性を帯び、ムラード四世（治世1623-40）の頃には、一部であろうが「人々や反乱兵士の会合場所」になっていた⁽⁵⁶⁾。

このように、およそ16世紀の初めから150年の間に、イスラム社会のカフェは、他愛ないおしゃべりや暇つぶし、健全な楽しみやいかがわしい快楽、文学・芸術・科学の論議、さらに広義の（あるいは裏の）政治活動などの場所として、都市あるいは村に定着した。

ちなみに、イスラム社会のカフェは、もともと男の世界のものであり、女性は客としても、ごく稀にしか資料に顔をださない⁽⁵⁷⁾。外出や家の外での行動に厳しい制限を受けていた女性たちが、比較的自由に出入りすることができたのは、墓参の外に、公衆浴場であった。社交の場所として、男にはカフェがあり、女性には公衆浴場があった、といえなくもない⁽⁵⁸⁾。

コーヒーポット（沸し器）と飲む茶碗は、陶製が一般的であったように思われる。磁器もあった。中国の陶磁器は輸入され、入手は簡単であった。銅製のポットも使われた。テヴノーのいう大鍋でコーヒーを沸かす店は希だったようだ⁽⁵⁹⁾。上等な容器には、金や宝石で装飾された外枠がついていた。装飾を凝らした容器類は中国からの輸入品に加工したものであった。宮廷や上流社会では、これが贈答の品となり収集の対象とされた⁽⁶⁰⁾。

3 コーヒーとカフェの禁止令

メッカ事件

コーヒーは紅海を渡って、原始キリスト教のエチオピアからアラビア半島のイスラム教の世界へ入った。新しい飲み物コーヒーは、シャリーア（イスラム法）に照らして是か非か。これが争われた。鮮明な歴史として残っている事件がある。いわゆるメッカ事件（1511年）である。前述したジャズィーリーの文書もこれを詳しく伝えている。その他の資料もある。およその経緯は次のようなものであった⁽⁶¹⁾。エジプトを中心にヘジャズ地方も支配したマムルーク朝（1250-1517）の時代である。マムルーク朝の代官で、ムフタスィブの地位にあったハーイル・ベグ・アルミーマールという人物がいた。ムフタスィブとは、市場監督官の意味で、本来の職務は、イスラム法の諸規定が守られているかどうかを広く監督することにあった。社会倫理にかかわるあらゆる事柄に監督権をもっていたので、善を勧め悪を禁止する、いわゆる道徳の裁定者の職務も担い、また都市の行政、警察権に関係することもあった⁽⁶²⁾。ハーイル・ベグの目には、メッカのスーフィー教徒が宗教儀礼で

コーヒーを飲むのが、許されないことだと映った。とりわけ、スーフィー教徒がハラーム・モスク〔イスラムのもっとも神聖な神殿カーバを囲む聖所〕の一角で、夜、ランプのまわりに集まってコーヒーを飲んでいて〔これは、ズィクルでなく、予言者ムハンマドの生誕を祝う儀式であった〕のを見て危険を感じた⁽⁶³⁾。ハーイル・ベグは、法学者の集まりを開き、コーヒーがシャリーアに照らし禁止される飲み物であることを認めさせようと図った。会議には、イスラム教の主流各派の法学者が集まった。イスラム教では、すべての植物は、本来、人類が享受するために神によって創造されたとされているので、本来的許容性をもっている。食べられるものは、禁止すべき何らかの特性が証明されるまでは、適法である。もし、コーヒーが心身に害を与え、また陶酔、享楽あるいは馬鹿騒ぎを引き起こすと分かった場合は、禁止されるべきものとなる。この点をめぐり議論が進められ、高名な医者二名が証言するために呼ばれた。二人とも、コーヒーは、冷と乾の性質を持つので調和のとれた気質を保つためには有害であると述べた。参加者のなかに、自ら立って、コーヒーは人を酔わせて危険な害がある、精神や性格が変わり苦しんだ、と述べる者もいた。法学者たちは、じつにあっさりとしてコーヒーは医学的にみて禁止されるべきもの、とした。議定書に署名をした法学者もいた。ハーイル・ベグは、議定書の写しにファトワー（法勧告）を求める文書を添えて、カイロの中央筋に送った。そして、その返事を待ちながら、議定書を根拠に、メッカでのコーヒーの販売と飲用を禁止し、コーヒーを焼却処分し、違反者に鞭打ちの刑を加えた。ところが、カイロから届いた回答（布告の形をとっていた）は、集まりは不可、しかしコーヒーそのものは適法、というものであった。この回答の内容は、すぐ一般に知られ、メッカの人々は、またコーヒーを飲み始めた、という。

ちなみに、メッカは聖地だが、メッカも含むヘジャズ地方は、政治宗教的にはカイロの管轄下に置かれていた。遠いイスタンブールにはカイロから措置が報告された。経済面でも、ヘジャズ地方はカイロに依存し、食糧その他生活必需品はカイロからやってきた⁽⁶⁴⁾。

このメッカの出来事を仕組んだのは、ハーイル・ベグではなく、黒幕の三人だとも考えられている。一人は、議定書を作成したシャムス・アッディートン・ムハンマド・アル・ハナフィーといい、大カーディー〔四人の最高位の裁判官〕の執達吏を務め、ハティーブ（金曜日正午の集団礼拝や二大祭——断食明けの祭りと犠牲祭——の礼拝の際に、礼拝に先立ってなされる説教を行う人）を兼ねていた。あとの二人は会議で否定的証言をしたベルシャ出の兄弟の医者ヌール・アッディーン・アフマド・アル・カーザバーニとアラー・アッディーンだという。会議の運びの手順のよさ、証言のために待機していたような二人の医者、ここに作為が強く感じられるという⁽⁶⁵⁾。

このときコーヒー反対の主役を演じた者たちには、のち、解任、処刑など、奇妙に符合する運命が待っていたという。ハーイル・ベグは、翌年解任、シャムスは、官職と特権を奪われ、二人の医者は移住先のカイロで、オスマン・トルコの支配が始まった1517年、「神のみが知り給う理由で」、セリム一世により、胴切りの処刑をうけたという⁽⁶⁶⁾。

以後メッカでは、カフェには平穏な日常が続く。1525/26年、ムハンマド・イブン・アル・アッラークという有力な法学者がメッカにやって来たとき、カフェでの不道德な行為を挙げて、閉鎖を指示したが、翌年に死んだので、カフェが再開されたのは間違いないと

いう⁽⁶⁷⁾。これが、ヘジャズ地方での最後の大事件だといわれる。おそらく、この法学者の目は、「コーヒーの法判断に関する論考」（16世紀前半のものと推定される）を書いた人物と同じものを同じ目で見えていたのであろう。この論文は、コーヒーが禁じられなくてはならない理由を「それが居酒屋（hanat）で飲まれていることが明白だからである。居酒屋にはあらゆる非難すべき事柄、歌姫（quynat）、[さまざまな種類の]弦楽器・・・淫らな気晴らしのための楽器演奏、踊り、手拍子などがすべて行われている」⁽⁶⁸⁾と述べている。

1544年の巡礼期間中、メッカに、ダマスカスからの巡礼のキャラバンが、スルタンの発したコーヒーの飲用と販売を禁ずる勅令をもってきたが、メッカの人々は、一日だけこれを守るにすぎなかったという⁽⁶⁹⁾。オスマン政府は、初めの数十年は、コーヒーに対し好意的であったから、1544年の禁令は、突発事のようなものらしい⁽⁷⁰⁾。

カイロとエルサレム

カイロでは、同じ1511年、メッカの場合と似ているが、反対派の旗頭ハーイル・ベグの使喚によって、イスラム説教僧たち（fakih）がコーヒーを非とする意見をまとめた。説教僧の間には反コーヒー強硬派が多かったといわれる。さらに1532/3年に、法学者で有名なアズハルの説教僧アハマド・イブン・アブド・アルハック・アル・スンバーティー（1547年没）が、ある信徒の質問に答えて長い回答書を書いた。この文書はコーヒー反対派の権威ある典拠とされ、スンバーティーは、反対派の祖とみなされた。1534/35年になって、スンバーティーはアズハル地区の集まりで幾度かコーヒー反対の説教をした。煽られた信者たちは、カフェを襲い、店内を壊し、コーヒーを捨て、店主や客に暴行を加えた。この事件は、訴えられて裁判官ムヒー・アッディーン・ムハンマド・イブン・イルヤースが裁くことになった。かれはカイロの有名なウラマーたちに意見を求めるほか、みずからコーヒーを飲み、かつ会議の出席者にもコーヒーを飲んでもらい陶酔やその他精神的影響の有無を観察して調べた。かれの結論は、コーヒーの飲用はシャリーアに違反しない、であった⁽⁷¹⁾。その後カイロでは、1539年のラマダーンの時に事件が起こっている。ラマダーンには、昼間の断食から解かれた人々で、夜の町のカフェが賑わう。夜警長は、あるカフェに手入れを行い、客に手枷、足かせをはめて引き立てて行き、17回の鞭打ち刑を加えた⁽⁷²⁾。カイロでは、この後、コーヒーはときに短期間、禁止されたが、しだいにイスラム教の権威者の間でも一般人の間でも、コーヒーを認めて愛飲する人々が増えていった⁽⁷³⁾。

エルサレムでも、カフェ禁止の記録がある。1562年にエルサレムのカーディ〔民事、刑事をつかさどる裁判官〕に指令が届いた。その内容は、カフェには、信仰を損なう不良が集まり、イスラム社会の公序良俗に反する施設なので根絶すべし、となっていた。

古来エルサレムにはカフェはなかった。この地の住民は熱心に神を崇拝し、一日五度の祈りを聖なる務めとしていた。しかるに、現在、新しく五ヶ所にカフェが建てられている。そこには、昼も夜も悪行をやめず善人に害を与え悪質な行為を行い規則を守らない者が集まっている。その連中は、イスラム教徒が聖なる行為をなし神を敬う妨

げとなる悪人、神を恐れない者たちである。それゆえ、これらの由緒正しき土地からカフェを一掃し根絶しなくてはならない⁽⁷⁴⁾。

イスタンブールの場合

イスタンブールでは、1554/55年に最初のカフェが開かれて以来、とくに1557年から急速に増えて行く。繁栄の逆表現なのであろう、宗教界の反コーヒー・反カフェの論と運動も繰り返された。すでにメッカやカイロで見られた現象である。禁止・閉店の指示がカーディー〔裁判官〕に対し、再三出された。ウラマーたちは、カフェは悪徳の巣、居酒屋のほうはまだしもだ、といい、説教僧たちは、批判に熱を込め、ムフティ〔イスラム法学者〕たちはファトワー〔法勸告〕で、炭化常態のコーヒーはコーランに照らして禁止されている、と回答した。また、コーヒーが、集りでワインのように回し飲みされるのは、墮落行為だと断じた。オスマン・トルコの最高の宗教的地位であるシャイフ・アルイスラームの地位にあったエビュ・スウード・エフェンディ（1491-1575）もコーヒーとカフェを容認せず、イスタンブールの港に陸揚げされたコーヒーを船（複数）に戻させ、袋ごと海に沈めさせたという⁽⁷⁵⁾。1568年にも改めて、カフェの禁止令が出された記録が残っている。ワイン、コーヒー、ボザを提供する店を閉鎖せよ、という指示である。対象は、ワイン酒房、カフェ、ボザ酒家である⁽⁷⁶⁾。ボザは、大麦、小麦、あるいは粟など穀物の粉を原料とする冷たい飲み物で、安く、ビールに似た味がする。

オスマン・トルコでは、為政者も禁止令を出している。まず、ムラード三世（1574-95）である。その後数人のスルタンを数えるが、アハマド一世（1603-17）とムラード四世（1623-40）がとくに有名である。しかし、いずれの場合も、厳密な実施は困難で、従う人々も少なかったといわれる。ムラード四世（1623-40）は、カフェの出火による大火災を口実に、1663年に、カフェの取り壊しを命じ、同時に、コーヒー、タバコ、アヘンを禁止した。処刑により人命も失われたという。この厳しさは、むろん、禁止の本当の動機が、火災防止ではなく、クーデタ防止という政治的な理由にあったからである。カフェで練られたクーデタ計画が実行に移されたのである。メヘメド四世（1649-87）も、街頭売りは認めたが、カフェは禁じた。イスタンブールでのカフェの徹底した禁止は30年ほど続き、カフェは街から姿を消すが、17世紀の末に再開される⁽⁷⁷⁾。ただ、この禁止期間でも、隠れカフェは存在した。袋小路の奥に隠れ、商店の裏戸から通じる部屋の奥に隠れて、カフェがあった。警察の長や取り締まり役人に賄賂を効かせていたという⁽⁷⁸⁾。

居酒屋からカフェへ（イスラム社会の施設）

イスラム世界でのコーヒー禁止の法理は、ワインと同じように人を酔わせる、であった。アラビア半島のアルコール飲料には、以前からワイン、ナツメヤシの酒（とくに中央アラビア）、蜂蜜酒（とくにイエメン）などあり、マホメットの判断は揺れた末にワインを禁じた（コーラン五章90-91節）。ワインはハムル（酒）とされたのである。コーヒーははるか後に移入された飲み物だから、コーランには規定がない。それで、コーヒーは、ワインとの類似で論じられた。ここの法理は、いわゆる類推（キヤース）であった。一般に、

シャリーア（イスラム法）の法源は、四つあり、コーラン、伝承（ハディース）、合意（イジュマー）とこの類推である。コーヒーはワインと同じように酔わせるか。論争は、ときに熾烈であったが、宗教界の最終見解は、コーヒーはワインと違って酔わせないから、適法だ、に落ち着いた。また、シャリーアは、自殺を禁じており、そこから、有害な物質の摂取は違法とされ、ハシーシュの非は、そう根拠づけられる。コーヒーはどうか。1511年のメッカ事件では、医者二人が、コーヒーは有害物質と証言した。しかし、一般的に、医学的な判断は、医者により違い、一致した見解はせず、結局、カーディー〔裁判官〕等の判断に委ねられた。コーヒーは炭化しているから、禁止されているとの主張もなされた。しかし、この点も、炭化の状態に達していなければシャリーアに違反しない、という見解に落ち着いた。結局、人々の間の広いコーヒー受容に妥協したのだ、ともいえる。カフェでは賭け事や売春、麻薬、さらに社会規範にもとるとされた音楽などが見られたから、道徳感情を刺激し、カフェ憎しの感情からコーヒーも非とされることもあった。宗教界では、しかし、カフェは信仰生活に悪影響を及ぼす、との見解は後退して行った。16世紀には、コーヒー反対の論拠のひとつひとつが力を失い、コーヒーを容認する見解が一般化した⁽⁷⁹⁾。容認を越え、コーヒーが精神に与えてくれる幸福感（マルカハ）を積極的に称える信者もいた⁽⁸⁰⁾。

前述のカーディルの「コーヒーの適法性に関する最良の証拠」（1587/88）は、コーヒーの是非を巡る宗教上の争いの節目になった弁護論である。そこには、コーヒーの語源、意味の他に、コーヒー豆の性質と特質、飲用の始まり、その効用が述べられ、さらに1511年メッカでの是非両派の言い分、反対理由への回答、メッカでの論争時のアラビア詩人たちのコーヒー賛歌の集成を内容としている。

カフェを危険視したのが、信仰を司る人々の他に、また別に政治の権力者であったのも先にみた通りである。メッカやカイロ、さらにイスタンブールなどでのカフェ禁止令は、表裏の比重こそ違え、宗教的理由を表向きにし、真の理由を包み隠していたともみられる。しかし、宗教的権威と同様に、政治の権力も、結局、カフェをイスラムの地上から消すことはできなかった。カフェはムスリム社会の制度として定着する⁽⁸¹⁾。あのイエメンでもいつしかたくさんのカフェが開かれる⁽⁸²⁾。

中近東地域に、カフェ以前にあった社交施設は、居酒屋であった。居酒屋は、中世後期からあったという⁽⁸³⁾。イスラム世界で生まれたカフェは、実は、自然の成り行きとも解せられようか、この居酒屋を換骨奪胎した施設であった。ゲームと賭け、音楽演奏や歌姫、踊り、性的快楽の提供などはもともと居酒屋のものであった。ひとつ、ワインがコーヒーに置き換わった。上品な文学論もできる脱アルコール施設にかわる⁽⁸⁴⁾。カフェはムスリムが経営する社会施設として浄化され、ムスリム社会公認の施設になる⁽⁸⁵⁾。居酒屋は、非ムスリムによって経営される非ムスリムの施設であり続ける。1585/86年、イスタンブールの居酒屋は、4,558軒を数えたと伝える資料がある⁽⁸⁶⁾。誇張だとしても、盛んだったことを、さらになにより人間には必要だったことを物語る。ここには、イスラム社会の（たとえ一時的な場合であれ）はみ出し者も、反逆者もやってきたのである⁽⁸⁷⁾。

4 アラビア医学のコーヒー論

ギリシャ古来の宇宙論と医学

アラビア医学の古書にコーヒーが記載されているが、メッカ事件（1511）の起きた頃、医者たちには、コーヒーを積極的に研究する姿勢が薄く、むしろこの事件をきっかけに、コーヒー論が盛んになった。16世紀、17世紀に有害論、部分有害論、無害論、効用論、つまりさまざまな医学的見解が提出されたが、一致に達しなかった⁽⁸⁸⁾。共通していたのは、有害論無害論ともに依拠した医学の基本の枠組みである。いわゆる四元素・四体液説である。これは、次にヨーロッパにも引き継がれる。

この考えは、遠くギリシャに溯る。それは、アナクシマンドロスなどをはじめとするギリシャのコスモロジーの基本タームであった。アナクシマンドロスでは、火、水、地、気の四元素が、世界形成の原理とされ、動物植物、人間、自然、宇宙一すべての存在をつくる原初的物質とされた。エンペドクレスは、この四元素を基本に、宇宙の成り立ちと構造、さらに、身体と諸機能について、理論的な説明をした。宇宙の万物は、四元素の離合集散からなり、たとえば、骨は地二、水二、火四の割合からつくられている、血と肉は、ともに四元素が同じ割合になっている、樹も鳥も人間も四元素の混合（一定の比）からなっている、四元素を混合させ、あるいは分離させるのは、愛（引力）と争い（斥力）である、と。エンペドクレスにおいては、この四元素と熱冷乾湿が厳密な対応関係で構想されていた。たとえば、火は、熱と乾の性質をもち、事物や人体のなかでそれを高める作用をする、とされた。アルクマイオンは、人間の身体が、熱いものと冷たいもの、湿ったものと乾いたもの等の対立物から成り、それら諸力の間に平衡がなりたっているとき人は健康を保つが、熱や冷の超過や不足のために調和が破れ、諸力のうちの一つが全体を支配すると病気になる、と主張した。健康とは諸性質の適度な混合なのである。アルクマイオンは、イタリアの南部クロトンを本拠としたピュタゴラス派に属する。この考えは、ピュタゴラス派のものでもあった⁽⁸⁹⁾。

いわゆる四体液の説もこのような大宇宙（自然）と小宇宙（人間）を貫くコスモロジーの一部である。人体の中には四種の体液、すなわち、血液、黄肝汁、黒肝汁、粘液があって重要な役割をしている。血液は気をもっとも多く含み、黄肝汁では火が多く、黒肝汁では土の割合が高く、粘液で多いのは水で、各体液は、それぞれうちにもっとも多く含む元素の性質と作用をもつ。たとえば、血液は、気という元素をもっとも多く含むから、気と同じように体を温め、また湿らせる作用をする。血液一気一熱と湿、である。以下、黄肝汁一火一熱と乾、黒肝汁一土一寒と乾、粘液一水一寒と湿と想定された。自然が四特性（熱冷乾湿）の均衡で調和が保たれているように、人体も四体液のバランスで健康が保たれる。厳密にいうと、各人に、平均した完全なバランスがあるのではなく、各個人は四体液のうちいずれかが多い。そこから、いわゆる血液質の人（快活な人）、黒肝汁質の人（憂鬱質の人）、黄肝汁質の人（怒りっぽい人）、粘液質の人（冷淡な人）の区別が生ずる。不均衡が限度を越えると、健康が損なわれ、病気になる。

この考えは、古代ギリシャを代表する紀元前五世紀前後の医師ヒポクラテスの拠った考

えでもあり、また紀元二世紀に出たローマ時代の偉大な医師ガレノスにも受け継がれた。アラビアの医学は、九世紀以降、多くのギリシャ医学の本を翻訳研究し、この医学的伝統を継承した。

アラビア医学のなかのコーヒー

前述のように、アラビア医学では、肉、野菜、魚、穀物、果物などあらゆる食物や飲み物、さらに薬について、ひとつひとつ、熱、冷、乾、湿の程度が四段階に定められ、食養生と治療の基準になっていた。食べ物と薬は連続しており、熱、冷、乾、湿のどの性質であれ、段階一の場合は食べ物、二の場合は食べ物あるいは薬、三の場合は薬で、四段階の場合は毒とされていた。病気を治すには、体液のバランスを回復させる食べ物や薬を与えるとよいことになる。粘液質が過度なケースでは、冷と湿が優勢だと考えられるので、熱と乾の程度の高い薬や食べ物を与えるのがいい。これが逆では、当然、病気は悪化するとされた⁽⁹⁰⁾。

コーヒーは、アラビア医学によれば、第二段階の冷と乾であり[すると、食べ物であり薬でもあることになる]、別の説では、段階一の熱と段階二の乾である。さらに、外皮と仁を区別し、同じ冷でもそれぞれ違う段階にある、ともいったし、コーヒーの果実そのものは、乾の第三段階のものだが、水と混ざると、一段階下って乾の程度が二の飲み物になるのだ、という医者もいた。細かい点までみると、見解はさまざまであったが、およそいえば、コーヒーは、冷・乾か熱・乾かどちらかで、食べ物でありまた薬でもあるものと理解されていた⁽⁹¹⁾。

コーヒーが、冷と乾の性質をもつと考える医者にとって、コーヒーは、黒胆汁の体液が多い人にはよくないことになり、憂鬱症を引き起こす危険がある。憂鬱症は、冷・乾の体液の過剰でおこる病気だからである。同じ理屈から、多血質（熱と湿がまざる）の人や女性には、コーヒーの冷・乾の作用はよい。コーヒーは熱・湿だ、とする逆の考えに立てば、コーヒーは湿気をとるので、粘液質（冷と湿がまざる）の人によく、また、粘液性の咳や風邪を乾かし治癒的に作用することになる⁽⁹²⁾。コーヒーの効用として、血が沸き返り、天然痘や麻疹、出血性発疹を防ぐ、といわれることもあった⁽⁹³⁾。このとき前提は、コーヒーは熱にして乾である。

コーヒーは夜の仕事に活力を与えるとされたが、他方で、不眠という不快な症状も引き起こすとされた。不眠症状が出るのは、飲み過ぎの場合であるとされた。コーヒーを飲むと痩せるともいわれた。食欲を減退させるとも、また、性欲を減退させるともいわれた。痔の原因になり、再発性の頭痛の原因になる、と警告した医者もいる。この医師は萎縮性の癩になる恐れがあるとも指摘した。コーヒーには、利尿作用があるともいわれ、腎臓によいとされた。アラビアの医学全体でみれば、弊害や有害の論より、有益な効用を指摘する方が多かったとみられよう⁽⁹⁴⁾。

コーヒーの名

コーヒーは、アラビア半島の先端イエメンに現れて以来、アラビア語の世界ではカフワ

(kahwa) と呼ばれた。このアラビア語はもともとワインを呼ぶ名のひとつで、アラビアの古詩などに見られた。14世紀に、新たにアラビア世界に入ってきたコーヒーにこの語があてられた。定説はそういう。コーヒーの原産地エチオピアのカファ地方の名によるのではない。エチオピアと周辺国では、ブーン (bun) と呼ばれる。つまり、現地語では、コーヒーは、ブーンで、このブーンは、コーヒーの木も豆も、飲み物としてのコーヒーも指した⁽⁹⁵⁾。オリエントのコーヒーは、豆 (正確には、仁) から作ったものだけではなく。外皮を材料にしたコーヒーもあった。コーヒーの外皮を軽く煎って挽いて粉にしていれるこのコーヒーは、「紅茶のような味がし、爽やかな気分となる」と18世紀の半ばに中東を広く調査旅行をしたニーブール (デンマークの地理学者。1733-1815) は言っている⁽⁹⁶⁾。豆から作ったコーヒーが、カフワ・アルブンニーヤと呼ばれたのに対し、外皮 (殻) から作るコーヒーは、カフワ・アルキシリーアと呼ばれた。キシウル (kishr) ともいわれた。イエメンでは、一般にキシウルが好まれた。豆からのコーヒーも飲まれたが、これもキシウルと呼ばれた。イエメンでも、キシウルに、カルダモン、丁字、しょうがなどが加えられて飲まれた。

5 産地と取引

アラビア半島の産地と市場

コーヒーは、アラビア半島では、南西部の山地を産地としている。とくにサラートの西側がよい。高度が1,100メートルから2,200メートルの盆地や斜面に肥沃で湿った土壌、一定の暖かい気温がある。年間を通じて収穫されるが、主な収穫期は、三月から六月。アラビア半島の産地の南限は、ビラード・アル・フジリッヤ、ワーディー・ワラザーン、ワーディー・バナナ、東限はジアウフ。良質のコーヒーは、ハラズ山、アル・ファルシュ盆地、ジャバル・ライマ、それにウダイン周辺地域でとれる。コーヒーは、はじめおよそ二世紀半の間は、イエメンが、種子や苗木の持ち出しを厳しく監視し、生産を独占した。コーヒーは、貴重な銀をもたらす交易商品だった。

中心の市場は、二つあった。モカとバイト・アル・ファキーフである。アラビア人など、イスラム商人が利用したのが、バイト・アル・ファキーフで、イギリス人など外国人がおもに利用したのが、モカである。バイト・アル・ファキーフはやや内陸、モカは港であるが、たがいに近い。モカには、モカより南方の生産地のコーヒーが集まり、バイト・アル・ファキーフには、北方のコーヒーが集まった。市場の規模は、バイト・アル・ファキーフがはるかに大きく、18世紀の初めには、イギリス、オランダ、フランスの商人も姿を見せるようになった。市場には、多くの小生産者が、自分でコーヒー豆を持って来た。大生産者は、バイト・アル・ファキーフの大商人を使って市場に出し、売りさばかせた。海は船、内陸ではラクダが、コーヒーを運んだ。ただ、紅海に限って見ると、紅海は珊瑚礁が多く、風の変化が激しかった。船材も遠くアナトリアやインドに仰ぐので、調達が難しい。このような理由で紅海の水運は危険で高くつくので、一般には船よりラクダが選ばれた⁽⁹⁷⁾。

取引シーズンは、三月から八月で、モカなどに、スエズやジッダ、バスラ (イラク) や

スラート（インド）から船がつく。食料品や、インドの綿布、ヨーロッパの毛織物などが積まれている。商人はこれを売って、コーヒーを買っていく。ヨーロッパやトルコの商船の姿が見えると、市場ではすぐに値が吊り上げられる、あるいはそれを狙って供給が停止される。このような駆け引きはともかく取引価格の決め手は、ジッダとカイロの卸売価格であった。

オランダとイギリスの東インド会社

イギリス東インド会社では、早くも1609/10に、（コーヒーなども含めた）通商の可能性を探るために、モカへ船を送り、内陸の首都サナまで達した。オランダ人商人ピーター・ファン・デン・ブルーケは、モカでコーヒーを知り、イエメン君主から非常に有利な通商の条件を得たため、サナのアラビア人、ペルシャ人、インド人商人は、驚きかつ困惑したという⁽⁹⁸⁾。モカの港から、コーヒーが希望岬回りのコースを使って本格的にアムステルダムやロンドンへ運ばれるようになるのは、17世紀半ばを過ぎてからである。アムステルダムでは、オランダ東インド会社によって、1661/2年にはじめてコーヒーの競売が行われる。コーヒーは、この時、「モカのカウワ」（cauwa de Mocha）の名で売られた。ロンドンでは、同じ1660年代に、こちらは、「コーヒー種子」（coho seeds）の名で売られた。ヨーロッパの商社は、はじめ、インドのスラートの現地商人にイエメンでのコーヒーの買い付けを依頼していた。17世紀の末にヨーロッパでコーヒーの需要が増えると、モカで直接買うようになる。オランダの東インド会社は、1684年に一度閉鎖したモカ在外商館を1696年に再開。イギリス東インド会社は、収穫期になると、インドの拠点スラートからモカに買い付け係を派遣した。その一方で、ロンドンからもコーヒー買い付けの役目をもたせた高級船員を添乗させ船を出した。ただ、オランダ東インド会社は、販路としてはじめアジアを狙い、イギリス東インド会社は、はじめから、イギリスも含む北ヨーロッパ市場を狙った。オランダ東インド会社が、ヨーロッパへの輸入の体勢を整えるのは、1690年以降になる。東洋貿易では、先発で、丁字やナツメグを産するモルッカ諸島をおさえすでに安定した地位を築いていたオランダと、後発で必死だったイギリスの意識の差であろうか。コーヒーの買い付け量もイギリス東インド会社の方が、はるかに多い。1664年から1700年の間では、ほぼ毎年コーヒーを買い付けている。たとえば、同社の帳簿によれば、1664年では約20トン、1690年は約136トンである。17世紀後半は、北ヨーロッパへのコーヒー輸入の初期にあたる。この時期でみれば、北ヨーロッパへのコーヒー輸入の主役は、イギリスであった⁽⁹⁹⁾。スルタンは、コーヒー取引において、トルコ商人がヨーロッパ商人に圧迫されるのを見て、数回、イエメン君主に使節を送り、コーヒーの輸出からヨーロッパ人を排除するよう要請したという。なお、次の18世紀になるが、イギリスのコーヒー需要は、さらに高まり、ボンベイ総領事館は、1716年、在外商館をモカに常設し、年間を通してコーヒーを安く買うことを決めた。主な取引期の高値を避けるためであった。ヨーロッパ商人に与えられる取引条件は、現地の商人より、たとえば輸出税が低いなど、恵まれていた。

主要な消費地（オスマン・トルコ）

イエメン産コーヒーの主要な消費地が、オスマン・トルコ領土内や周辺国であるのは変わらない。この領域でのコーヒー需要は大きく、イエメンのコーヒーの大部分（17世紀末で60%とする説がある）は、アラビア人、トルコ人、ペルシャ人、インド人の商人に買い取られた。アラビア人やトルコ人の商人は、前述の内陸のバイト・アル・ファキーフでコーヒーを買い付けた。中東のコーヒーの最大中継市場はジッダであったから、イスラム商人は、ジッダに近いフダイダ港やルハッヤ港を利用した。イスラム商人たちが、広大な消費地にコーヒーを運ぶルートは、最大の中継地ジッダを経て、スエズからカイロであり、もうひとつは、イラクのバスラからユーフラテス川（正確には川沿いの道）を逆上る商路である。いずれも香辛料や奢侈品が運ばれたルートである。ペルシャやインドの需要は、小さかった。産地イエメンを出て各地へ運ばれて行くコーヒーには、輸出税、通過税の他に、地方長官がとって懐にいれる上積みも価格に加算された。コーヒーは、17世紀すでに、中近東貿易では、コショウなど香辛料や奢侈品になにほどこか換わる商品になっていた。1600年頃のカイロでは、大商人の一部はコーヒー商人であった⁽¹⁰⁰⁾。

ヘジャズ地方や紅海を定期的に往復する隊商や商船隊を支配していたのは、イスラム教徒であった。コーヒーはスルタンに守られたイスラム巡礼の道もたどった。コーヒーの卸売りやカフェの経営もイスラム教徒の手にあった。コーヒーやカフェは疑問視され批判され、ときに禁止されたのは事実だが、基本的に、コーヒーとカフェは、イスラム社会に受容され、反社会・反信仰の記号とはならなかった。それに係わったからといって社会的評価がさがるのでもなかった。16世紀の後半すでにコーヒーの投機によって富をえたウラマー〔信仰に関する学問知識に秀でた信徒。宗教的名望家ともいえる。この層から、法学者（ファキーフ）、教師、裁判官（カーディー）、ムフティー、イマーム、ハディース伝承者、コーラン読誦者、モスクの管理者など、イスラムの社会と信仰の要職を占める者がでる⁽¹⁰¹⁾〕が何人もいた⁽¹⁰²⁾。

参考文献

- a. 山川偉也『古代ギリシャの思想』 講談社学術文庫 1993。
- b. 前嶋信次『アラビアの医術』 中公新書 1965。（同名で、平凡社ライブラリー、1996）。
- c. ラルフ・S・ハトックス著 齋藤富美子・田村愛理訳『コーヒーとコーヒーハウス—中世中近東における社交飲料の起源』 同文館 1993。
- d. B・S・ドッジ著『世界を変えた植物』
- e. 矢島文夫「コーヒー大論争」 『歴史と地理』 369号（1986）所収。山川出版社。
- f. Ralph S. Hattox, *Coffee and Coffeehouses. The Origins of a Social Beverage in the Medieval Near East*. University of Washington Press, 1985.
- g. *Encyclopaedia of Islam* IV, 1st ed., Leiden, 1913-1936; New ed., Leiden, 1960-

- h. Hélène Desmet—Grégoire, *Les Objets du Café*. Paris, 1989
- i. Ulla Heise, *Kaffee und Kaffehaus. Eine Kulturgeschichte*. Hildesheim/Zürich/New York, 1987.
- j. Suraiya Faroghi, *Herrscher über Mekka. Die Geschichte der Pilgerfahrt*. München/Zürich, 1990.
- k. Carsten M. Niebuhr, *Travels through Arabia, and other Countries in the East*, 2 vols. Translated by R. Heron, Edinburgh, 1792.
- l. E. Birnbaum, *Vice triumphant. The Spread of Coffee and Tabacco in Turkey*. In *Durham University Journal* (December 1956), pp. 21-27.

注

⁽¹⁾大島洋写真展ブッナーエチオピア高原、至福のコーヒー・セレモニーを撮る。1998年3月5日—5月5日。TOTO食の情報館RECIPE 5F食のギャラリー。東京都中央区銀座7—8—7。

⁽²⁾g450 ⁽³⁾f30, 31 ⁽⁴⁾f22, 23 ⁽⁵⁾l32, 33 ⁽⁶⁾f14, 15 ⁽⁷⁾f132, 133 ⁽⁸⁾f131-136 ⁽⁹⁾f74

⁽¹⁰⁾f27 ⁽¹¹⁾g450 ⁽¹²⁾g450 ⁽¹³⁾f75, 76 ⁽¹⁴⁾f28, h12 ⁽¹⁵⁾h12 ⁽¹⁶⁾g450, h12, 39 ⁽¹⁷⁾f28

⁽¹⁸⁾f28 ⁽¹⁹⁾j218。聖地メッカへの巡礼は、遠く、北アフリカ海岸、中央アジア、そしてインドからもやってきた。かれらは、メッカ郊外のミナ (Mina, Muna) という町に滞在した。ここでは巡礼期に、歳の市が開かれ、巡礼者の多くが、物々交換に近い形でコーヒーを入手し、故郷へ持ち帰った。ここでは、インドの綿布、宝石、香辛料、薬種や染料も手に入った。ここではまた、何軒ものカフェがあり、エチオピアの奴隷女が楽器を鳴らし歌を歌っていたという (j218)。こう伝える歴史家のチェレビ自身もメッカに近いジッダで、個人用に大量のコーヒーを買いこみ、カイロに送らせたという。1650年頃である (j219)。巡礼の道の安全を保証するのは、スルタンの義務であった。特に砂漠のベドウィンの襲撃から巡礼者を守る必要があった。キャラバンは、大砲や銃で武装され、馬とラクダから編成された。巡礼のキャラバンにはふつう多くの商人も加わった (j46, 47, 95, 101)。

⁽²⁰⁾f147 ⁽²¹⁾f73 ⁽²²⁾f76, 79 ⁽²³⁾f77 ⁽²⁴⁾g450 ⁽²⁵⁾h12 ⁽²⁶⁾f73, 77, h15, 122 ⁽²⁷⁾g451, 122

⁽²⁸⁾図版6。52頁と53頁の間。 ⁽²⁹⁾122 ⁽³⁰⁾h12 ⁽³¹⁾f93 ⁽³²⁾f80 ⁽³³⁾f81, 82, 90 ⁽³⁴⁾f81, 82。また図版7, 9, 11, 12。いずれも52頁と53頁の間。 ⁽³⁵⁾f81 ⁽³⁶⁾f160 ⁽³⁷⁾h12 ⁽³⁸⁾h12 ⁽³⁹⁾f98

⁽⁴⁰⁾c239 ⁽⁴¹⁾122 ⁽⁴²⁾f98 ⁽⁴³⁾fの図版13。52頁と53頁の間。 ⁽⁴⁴⁾f101 ⁽⁴⁵⁾f103 ⁽⁴⁶⁾f103, 104

⁽⁴⁷⁾f104, 105 ⁽⁴⁸⁾f105 ⁽⁴⁹⁾f105 ⁽⁵⁰⁾f107 ⁽⁵¹⁾105, 106 ⁽⁵²⁾f107, 108 ⁽⁵³⁾f109, 110

⁽⁵⁴⁾f110, 111, 163 ⁽⁵⁵⁾f80, 81 ⁽⁵⁶⁾f102, 103 ⁽⁵⁷⁾f160 ⁽⁵⁸⁾f160 ⁽⁵⁹⁾f85-87。また図版3, 4, 6, 8。52頁と53頁の間。 ⁽⁶⁰⁾j219 ⁽⁶¹⁾f32-35 ⁽⁶²⁾140 ⁽⁶³⁾f44, 45 ⁽⁶⁴⁾j196, 197, 210, 211 ⁽⁶⁵⁾f35

⁽⁶⁶⁾f36, 37 ⁽⁶⁷⁾f37, 38 ⁽⁶⁸⁾f108 ⁽⁶⁹⁾f38, g451 ⁽⁷⁰⁾f147 ⁽⁷¹⁾f39, 40 ⁽⁷²⁾f40 ⁽⁷³⁾g451 ⁽⁷⁴⁾d161

⁽⁷⁵⁾123 ⁽⁷⁶⁾i108 ⁽⁷⁷⁾f102, g451, 123 ⁽⁷⁸⁾123 ⁽⁷⁹⁾f60, g451, 123 ⁽⁸⁰⁾f60, 139, 140

⁽⁸¹⁾f96, g451 ⁽⁸²⁾g421, k 2 巻190 ⁽⁸³⁾f77, 78 ⁽⁸⁴⁾f78, 79 ⁽⁸⁵⁾f96 ⁽⁸⁶⁾f160 ⁽⁸⁷⁾f96 ⁽⁸⁸⁾f63, 64

⁽⁸⁹⁾a46-56, 162-163, 210-213 ⁽⁹⁰⁾b166, 167 ⁽⁹¹⁾f64, 65 ⁽⁹²⁾f66, 67 ⁽⁹³⁾f68 ⁽⁹⁴⁾f67, 68

⁽⁹⁵⁾g449 ⁽⁹⁶⁾f84, k 2 卷229 ⁽⁹⁷⁾j212 ⁽⁹⁸⁾g453 ⁽⁹⁹⁾g454 ⁽¹⁰⁰⁾j219 ⁽¹⁰¹⁾c228,229,245 ⁽¹⁰²⁾f97